

ベラルーシ初のノーベル文学賞受賞者は真実を毅然と追い求めるジャーナリスト

『チェルノブイリの祈り 未来の物語』

スヴェトラナ・アレクシエービッチ著 岩波書店 1998

眞鍋由比

今年のノーベル文学賞は詩人でも小説家でもなく初めてジャーナリストが取りました。世界最高の権威である文学賞を与えられたスヴェトラナ・アレクシエービッチの作品はどんなものか。残念ながら日本語翻訳で現在購入できるものは『チェルノブイリの祈り』岩波現代文庫のみです。映画化もされた『戦争は女の顔をしていない』は戦争に行った女たちの証言を集めた本で女の眼からみた戦争を書いている。(神戸市立図書館では現在56人待ち)

1986年にウクライナで起こったチェルノブイリ原発事故で、ヨーロッパ全般に影響がありました。当時の気候条件で隣国のベラルーシが最も被害が大きかった。ベラルーシの領土には原発は一基もないのに、『チェルノブイリの祈り』はそのベラルーシの軍人、大学講師、役人、主婦、子どもなどにインタビューしたものです。作者によるとこの本はチェルノブイリのことではなくチェルノブイリを取り巻く世界のこと、この謎に触れた人がどんな気持ちで何を感じていたかを書いたそうです。

幸せな幸せな新婚生活を送っていた司書が、夫が兵士としてチェルノブイリに派遣されたばかりに不幸になります。腫れ上がって皮膚がはがれおちる全身。「わたしが恐れていたことは何か？ただ、彼が自分の姿に気づきませんように。そんな姿を知らないですみますように、ということ。鏡を全て隠しました。(略)わたしは図書館で働き、たくさんの本を読み、いろんな人に会います。私は死について話したい、理解したい。慰めになるものが欲しいのです。新聞や本を読んで知ろうとする。彼がいないと生理的につらいのです。ひとりではいられない……」その彼が死んだときの遺体安置所のひとは「おれたちはなんでも見てきた。大けがをしたのも、傷だらけのも、火事で死んだ子どもの死体も。だが、こんなのははじめてだ。チェルノブイリの被災者はいちばんひどい死に方をするよ」

アフガンから帰ったときにはこれから生きるんだということがわかっていた。でもチェルノブイリでは何もかも反対。殺されるのは帰ってからなんです。(兵士)

村中で面倒をみていたせむしで唾の、読み書きできない老女をさがしてほしい(主婦)

安全だ、危険だと科学者によっていうことが違う。チェルノブイリで使ったものは全て捨てたけどパイロット帽だけは子どもがほしがってあげてずっとかぶっていたら脳浮腫に。(兵士)

被爆した女性が生んだ女の子はおしっこもうんちも出るところがなく腎臓が一個だけ。なのに生まれたとき娘が笑った気がした。母親は助けたくて、医者へのアドバイスどおり外国の医療機関に実験動物扱いでもいいから娘を生かしてと何十通も手紙を出している。

汚染地域の犬を殺さねばならないつらさ。ぺろぺろ指をなめてくる子犬を撃たなくちゃならない。結婚を断られる被爆した兵士。隣に座ることを嫌がられる被爆したこども。

農村の准医師「こんな甲状腺でよく生きているって？わたしはこの子らの不幸を売り物にはしたくない。哲学的理屈をこねるのもごめんだ。放っておいてくださいよ。わたしたちはここでくらすなくちゃなんのです」

頭から信じていました、もしなにか重大なできごとがあれば、国民に知らせてくれるはずだと。特殊設備も特殊信号も、シェルターもあるんです。警告があるはず。私たちはそう信じきっていたのです。

まさにその後のフクシマを予言しているような本でした。事故当時のゴルバチョフの演説はすべて良好、すべて制御できているといていた。パニックを恐れて状況を隠し、避難が遅れた。どこかで聞いたことがある気がしませんか？

人々の言葉を拾い上げながら現実と人間同士の思いやり、醜さ、ずるさ、無力さ、愛情そして権力者・システムの非情を描き出している読み応えのある本です。

諧謔的なブラックジョークすらありました。「りんごはいかが、チェルノブイリのりんごだよ」「おばさん、チェルノブイリっていつちゃだめだよ。誰も買っちゃくれないよ」「とんでもない、売れるんだよ。姑や上司にとって買う人がいるんだよ」

そして証言によって客観的にもチェルノブイリが現在のベラルーシの不満の避雷針となっている可能性すら示唆していました。確かにこの人の本は読む価値がある。